

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月28日現在

機関番号：82662

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520151

研究課題名（和文） 実演データの統計処理に基づいた歌舞伎および落語における世代移行の構造比較

研究課題名（英文） Structure comparison of the generation shift in 'kabuki' and 'rakugo' based on a statistical work of public performance data

研究代表者

坂部 裕美子 (SAKABE YUMIKO)

公益財団法人 統計情報研究開発センター 研究開発本部 研究員

研究者番号：50435822

研究成果の概要（和文）：

歌舞伎および落語定席の戦後の興行データベースを集計し、上演演目や配役の構成を時系列的に比較した。歌舞伎は平成以降、上演演目に偏りが大きくなってきたこと、落語定席については、一部の落語家が何十年も恒常的に出演し続ける傍ら、年数回しか出演のない落語家が増加していることが確認された。しかし、これらの不均衡はどちらも近年解消される方向に進んでいる。これは、演者の世代交代の影響によるものが大きいと考えられる。

研究成果の概要（英文）：

The performance database of *kabuki* and *rakugo* in the postwar period was totaled, and the performance program and the cast was serially compared. As for *kabuki*, the performance program has inclined greatly after Heisei. As for *rakugo*, some comic storytellers are appearing constantly for dozens of years, however newcomer comic storytellers who appears only several times are increasing. But the imbalance in both genres is being canceled in recent years. It is considered that it depends on the performer's change of generation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：データベース 世代交代 伝統芸能 歌舞伎 落語 統計

1. 研究開始当初の背景

わが国の伝統芸能には、先達から伝承した芸を「古典」としてさらに次世代へ繋げるという使命と、現代にも通用するエンターテインメントの一つとして着実に存在していかなければならないという使命の相克に悩まされている、という共通点がある。しかし昨今は伝統芸能実演家といえども「確実な芸の伝

承の完了」より「客の呼べる演者としての一日も早い独り立ち」が先行している。「伝統芸能」のアイデンティティを考えた場合、これは由々しき事態であると言える。

このような問題を認識した上で、統計を用いた伝統芸能の実態研究の序として、落語の寄席定席興行の現状について、本研究の端緒となる報告を行った。その後、落語より規模の

大きい歌舞伎データベースを用いた演目上演傾向の分析結果を報告したところ、統計解析結果を利用した伝統芸能研究の進展についてさらなる確信を持つことができた。データ解析を進めるうちに、両者の相互比較に興味を感じ始めた。主観的判断が先行しがちなこの分野の研究において、恣意的判断の入る余地のない数値データを用いた考察を行うことには、大きな意味があると考えられる。舞台芸術活動の全てを数値・指標化して述べることは難しいであろう。しかし、数値化して評価できる部分は、一部ではあるが確実に存在する。その部分だけでも統計処理を用いて「微分的に」解明してみたいと考えた。

2. 研究の目的

- (1) 落語寄席定席データは画像データベースしか存在しないため、これをテキストデータベース化し、分析用データを作成する。
- (2) 完成したデータベースから興行上の特性を見出す。
- (3) 歌舞伎の興行データの特性と比較し、伝統芸能の世界特有の「世代交代」の発現を確認する。

3. 研究の方法

- (1) 興行データベースを整備する。

①歌舞伎については、社団法人日本俳優協会において、公演記録・実演家双方について必要な情報を収録したデータベースが、文化庁の支援で作成されている。これの利用許可を得ているので、このデータベースを分析用データとして再整備する。ただし、「漢字の新字・旧字を目視で確認し、重複データを統合する」という作業など、作業量が膨大なものは研究補助に依頼する。

②落語については、実演家分は市販のデータベースを入手し、分析用データとして整備する。公演記録の作成には、過去の寄席定席香盤データと市販のデータベース（定席以外の主要公演分）が必要だが、定席香盤は画像データでしか保存されていないので、電子媒体データ化の作業が必要になる。これは、研究補助に依頼する。

- (2) 完成したデータベースを分析する。

①まず興行全体の構造を把握する。（落語であれば「寄席の顔付けに登場した回数が多い落語家」、歌舞伎であれば「上演頻度の高い演目」等の確認）

②①で把握された特徴と関連のありそうな要因に関して、統計的な検証を行う。

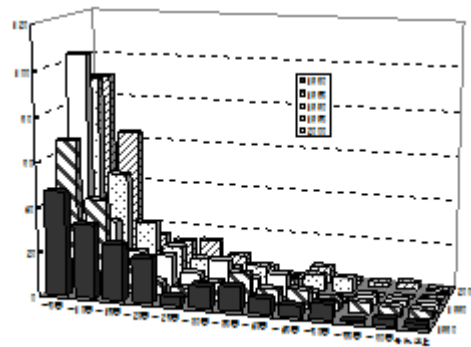
(3) (2) で得られた知見を踏まえつつ、「時系列変化」「世代交代」に着目して、両分野の比較を行う。

4. 研究成果

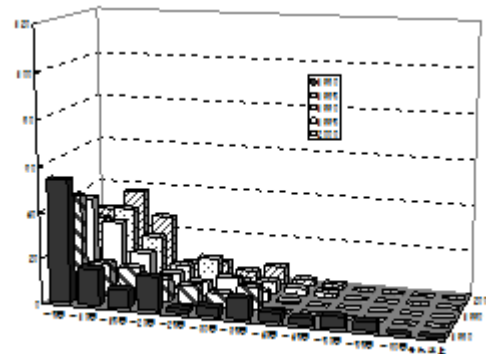
(1) 寄席の顔付けの古い年次のデータを用いた相関分析結果を、最新年次の結果と比較してみたところ、その値に違いが見られた。当初は要素間の関連の強さを確認するために行った分析だったが、その「強さ」の度合いは時を経るにつれ変わるものであるということが分かった。

(2) さらに、頻出出演者の顔ぶれが20年前から現在まであまり変わっていないという「顔付けの固定化」現象も確認された。近年落語家の人数は増加傾向にあるが、それは「寄席に出られない落語家」の増加に他ならない。「年間顔付け登場回数」のヒストグラムを以下に示す（奥が最新年次）。

<落語協会の場合>

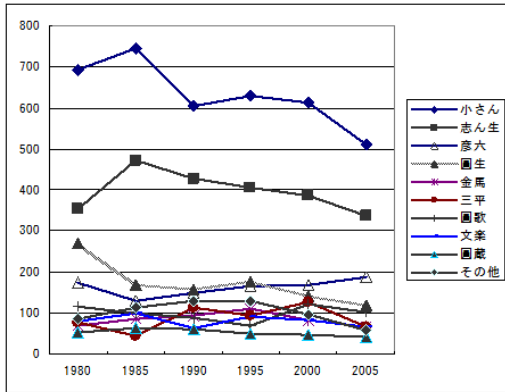


<落語芸術協会の場合>

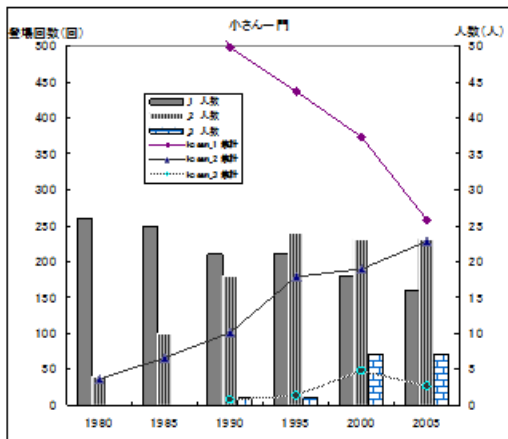


(3) 落語協会のケースを詳細に見ると、一門別登場回数が最も多いのは柳家小さん一門で、この一門は30年以上圧倒的に強い。しかも、一門内の個々の登場回数を世代間比較してみると、小さん一門は近年「回数の多い若手」が順調に伸びてきており、今後もこの大勢が続くものと予想される。逆に、圓生一門は、昭和時代には一大勢力をなしていたが、近年は入門者も登場回数も増えていない。これは、1978年の落語協会分裂騒動の余波と考えられる。

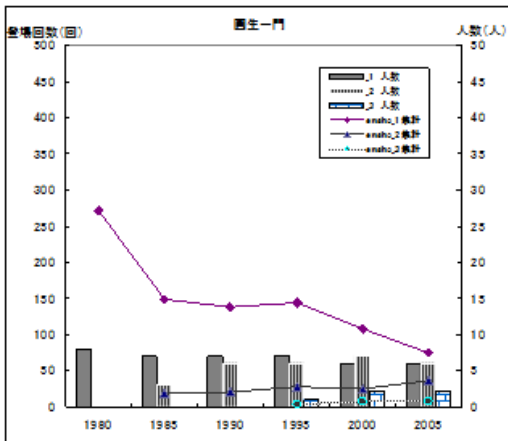
<一門別登場回数>



<小さん一門の時系列グラフ>
(棒:人数、折れ線:登場回数、次も同じ)



<圓生一門の時系列グラフ>



(4) 歌舞伎の演目の上演回数を集計すると、「三大狂言」と言われる「仮名手本忠臣蔵」「菅原伝授手習鑑」「義経線本桜」の上演回数が多い。ただし、それぞれの上演形態を見ていくと、「通し狂言」の形で上演が多い忠臣蔵、「寺子屋」だけの上演がほぼ半数を占める菅原伝授、特に1968年の三代猿之助による宙乗り演出の復活以降、彼による「川

連館」の上演が飛躍的に増えた千本桜、とそれぞれに違いがある。

(5) 歌舞伎興行全体の構成は、近年これら「有名演目」への偏りが大きくなっている。戦後の演目ごとの上演回数を集計すると、半数以上の演目は1度しか上演されていない。(掲載数値は2004年までの上演データを用いて集計したものである)

回数	頻度
1	800
2	170
3	94
4	54
5	35
6	33
7	24
8	14
9	16
10	11
15回以下	45
20回以下	24
25回以下	25
30回以下	16
50回以下	35
50回超	15

各階層に含まれる個々の演目を見ていくと、10回以上上演されているものは、筆者自身の経験として、見たことがある、もしくは、上演されるとの情報を得たことをはっきり記憶している演目が並ぶ、という印象がある。

(6) 昭和中～後期に活動した俳優とその息子の俳優が、それぞれ36-40歳の5年間に担当した「役数」と、その中で「上演回数の多い演目(戦後10回以上上演されているもの)」が占める比率を比較してみたところ、親世代の方が子世代より演じた役の数が多く、また、俳優として研鑽を積むべきこの年齢期に、ほとんど上演の機会のないような新作などにも親世代の方がより積極的に出演していたことがうかがえた。

(7) 歌舞伎と落語の興行集計の結果を比較していると、両者に共通のキーワードとして「偏り」が挙げられる。「偏り」は通常好ま

しからざるものだが、特に伝統芸能の分野の場合、偏ったり、固定的になったりすることが一概に悪いとは言い切れない側面がある。21世紀に入り、演者も観客も世代交代していく中で、「変わらないもの」を守っている、という姿勢を保ち続けることは、むしろ伝統芸能に期待される一つの使命かも知れない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

(1) 坂部裕美子 「歌舞伎公演出演傾向の世代間比較」文化経済学会<日本>年次大会予稿集:2011 (文化経済学会) pp. 80-81 2011年 査読無

(2) 坂部裕美子 「東京における寄席定席興行の顔付け傾向分析ー芸術活動評価への統計的解析手法導入の序としてー」アート・リサーチ 11号 (立命館大学アート・リサーチセンター) pp. 54-64 2011年 査読有

(3) 坂部裕美子 「寄席定席の『顔付け』集計ー40年の遷り変わりー」『ESTRELA』((財)統計情報研究開発センター) 2011年3月号 pp. 14-20 2011年 査読無

(4) 坂部裕美子 「師匠は選べるー落語家になりたいあなたへー」2010年度統計関連学会連合大会講演報告集 (統計関連学会連合大会事務局) p. 324 2010年 査読無

(5) 坂部裕美子 「寄席興行データから見る落語家の世代交替」文化経済学会<日本>年次大会予稿集:2010 (文化経済学会) pp. 146-147 2010年 査読無

(6) 坂部裕美子 「寄席興行から見る落語家の勢力分布ー寡占と世代交代ー」2009年度統計関連学会連合大会講演報告集 (統計関連学会連合大会事務局) p. 316 2009年 査読無

(7) 坂部裕美子 「落語家の勢力分布の変遷ー師匠から弟子へ・親から子へー」SAS ユーザー総会 アカデミア/テクノロジー&ソリューション セッション 2009 論文集 (SAS Institute Japan 株式会社) pp. 255-264 2009年 査読無

(8) 坂部裕美子 「計量的にみた寄席興行の時代変遷」2008年度統計関連学会連合大会講演報告集 (統計関連学会連合大会事務局) p. 29 2008年 査読無

(9) 坂部裕美子 「計量的にみた寄席興行の時代変遷」2008 SAS ユーザー総会 アカデミア/テクノロジー&ソリューション セッション 論文集 pp. 87-92 2008年 査読無

[学会発表] (計7件)

(1) 坂部裕美子 「歌舞伎公演出演傾向の世代間比較」文化経済学会<日本>年次大会

2011年7月3日 名古屋大学

(2) 坂部裕美子 「師匠は選べるー落語家になりたいあなたへー」2010年度統計関連学会連合大会 2010年9月8日 早稲田大学

(3) 坂部裕美子 「寄席興行データから見る落語家の世代交替」文化経済学会<日本>年次大会 2010年7月4日 兵庫県立大学

(4) 坂部裕美子 「寄席興行から見る落語家の勢力分布ー寡占と世代交代ー」2009年度統計関連学会連合大会 2009年9月9日 同志社大学

(5) 坂部裕美子 「落語家の勢力分布の変遷ー師匠から弟子へ・親から子へー」2009 SAS ユーザー総会 アカデミア/テクノロジー&ソリューション セッション 2009年7月30日 タワーホール船堀

(6) 坂部裕美子 「計量的にみた寄席興行の時代変遷」2008年度統計関連学会連合大会 2008年9月8日 慶應義塾大学

(7) 坂部裕美子 「計量的にみた寄席興行の時代変遷」2008 SAS ユーザー総会 アカデミア/テクノロジー&ソリューション セッション 2008年7月24日 タワーホール船堀

[その他]

ホームページ等

2009年9月10日付朝日新聞朝刊 (大阪版) および9月11日付朝日新聞夕刊 (東海版) に落語定席集計についての記事掲載

「小さん系よろしいようでー最大46人、中堅も伸び 統計研究員が勢力分析ー」

6. 研究組織

(1) 研究代表者

坂部 裕美子 (SAKABE YUMIKO)

公益財団法人 統計情報研究開発センター 研究開発本部 研究員

研究者番号: 50435822

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし